

族や恋人はいるでしょう！あなたにとってはただの犬コロかもしれないけれど、私たちにとってこの子は家族なんです。自分の大切にしているものがこんなふうになったら自分自身に置き換えて考えてほしい。あなたのしたことは許すことのできないこと。どうしてけがをしてうろたえるばかりの母を、むしの息のエリを見捨てて逃げたのか、人間として恥ずかしくないのかをよく考えてほしい。そして少しでも思いやりの心があるなら電話でもいい、どうですかと様子を聞いてやってもらいたい」でもその後、彼からは一本の電話すらかかってきませんでした。次の日母は、ふらふらするからだにむちを打ち、知人につきそわれDピザの店長に会いに行きました。

店長は、母に「お犬さんはどうですか？」といったそうです。母は、その言い方に言葉を失うほど憤慨しました。しかしその場はなにと言わず帰ったそうです。

事故後、自分の病気もそっちのけで母の病院通いは続きました。エリの目は見開いたまま動くことも出来ず、酸素ボンベをつけられ、生きながらえている状態でした。あの日から一週間がたったころ、三晩続けて「心音が止まりかけている。すぐ来るように」と先生から連絡が入り、母はそのたびに病院へ走りしました。この頃、パジャマを着て眠る状態ではありませんでした。いつでも走れるように、洋服を着たまま床についていました。しかしエリは、母がとんでくるともちなおし、呼びかけの声を聞くだけで心音が安定しました。意識もなく、息をするのもままならない容態だったのに、どうして母の気配がわかったのか、先生も「奇跡としかいいようがない」とおっしゃいました。

先生と奥様の徹夜の看護のおかげで二週間後、意識を取り戻し手をピクピクと動かすまでに回復しました。あの何度も死にかけた、たった2キログラムしかないエリが、すごい生命力でした。しかし、先生から、「目は、あきらめてほしい。足も動けるようになるかはわからない。ただ命だけはこのままだけの状態が続けば何とか助かるであ

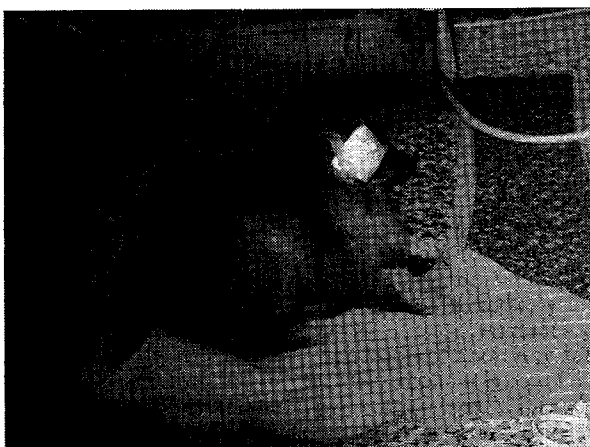
ろう」と。1月29日のことでした。流動食を少しでも食べれるようになったので、2月1日に退院する事が出来ました。事故後18日が経っていました。その日から母とエリの戦いが始まりました。

すでに4ヵ月が立ちました。母自身は、打ち身と心労で、3ヵ月間、病院へ通いました。エリの目はやはり見えず、今でも見開いたままです。涙が出ず、乾燥すると腐ってしまうので、目にガーゼを当て、30分おきに水で濡らすという毎日です。2、3歩ヨタヨタと歩いてはこけてしまいます。もう吠えることも出来ません。食事もひとりでできず、母が注射器で口の横から入れ、流し込んでいます。トイレも垂れ流しです。退院直後は、体が衰弱していたせいか、ほんの少し、何グラムという流動食を増やして食べさせたただけなのにすぐに下痢をし、それが10日以上続き、また入院ということにもなりました。今でもよく下痢はするので、そのたびにお風呂場で下半身を洗ってやります。1日のうち何度もこういう作業をす繰り返します。まともに歩けないので母が付きっきりでみています。買い物に出かけるのがやっとの状態です。目をはなすことができませ

ん。今の母は、エリの看病だけに生活しているといっても過言ではありません。

土下座までした彼が、今になって「自分は止まっていた。あの人がつつこんできた。」と話しているそうです。そんな馬鹿な！良心というものが無いのでしょうか。人間として恥ずかしくないのでしょうか。こんな人たちのために・・・と思ったら悔しさと憎しみがわきおこります。

Dピザは、事故処理を保険会社に任せました。事故後、一言の謝りの電話もあいさつも母のところにはありません。その上エリの賠償を13年前に買ったときの金額で支払うといってきました。母も私も悔しくて仕方ありません。物品だといわれたのです。あんな惨めな姿にさせられたのに。事故直後、母がなんとか助けてくださいといわなければ死んでいたかもしれません。こんなに大変な生活をおくらなくてもよかったでしょう。でも家族を見殺しにできたのでしょうか。何とかすれば助かるかもしれない命を、手もほどこさずに死なす事があの時できたのでしょうか。私はそんなものではないと思います。痛くても痛いともいえない、苦しくても苦しいといえない弱者だからこそ守ってやらなければならないのです。命の大切さに何の代わりがあるのでしょうか。生きる物すべてが平等でなければならないはずなのに。それを物品扱いだなんて。人間と同じ様に呼吸をし、感情を持って生きています。声に出して話せないだけなのだから。



国では、動物を保護するための法律が定められているそうです。わたしは、エリのことがあった初めてその存在を知りました。今までマスコミなどで動物に関する事件、事故がよく取り上げられているけれど、法律にもとづいて保護されたという話は一度も聞いたことがありません。そんな法律は、あってもないに等しい物なんでしょうか。人間が動物にケガをさせたり、虐待をしても公には裁かれず、

仮に裁かれても器物破損で罰金を支払えば許されるのです。それだけの価値しか認められていないのが今のこの国の現状なのだと今回の事でよくわかりました。

だからこそエリのことをすこしでもたくさんの人に知ってもらい、動物たちがこんなに弱い立場に置かれているのだということを、今一度認識し、考えてもらえればと強く思い、これを書かせて頂きました。そうすることで一つでも大切な命を救う事が出来ればと願っています。

母とエリの戦いはこれからも休みなく続く事でしょう。あの人たちに奪い取られた平和で穏やかな日々は、二度とかえってはこないけれど、少しでもその戦いが長く続くようにと母も私も願っています。大切な家族だからこそ・・・。

A・M

Postscript

エリは、その後看病の甲斐もなく永眠いたしました。

1996/7/22 pm 3:00 没